

胡桃

泉鏡花作

全一章

旅人が言った。

雪國の、緋葉の頃である。大通りに道普請に敷いた、一面の小砂利に、人のつけた路も、積つた雪を踏分ける一條路も、おのづから同じ形だと思ひつゝ、故郷の町を歩行いて居た。

小ぎれいな菓子屋がある。

彼は、その店へ入つた。

「胡桃の砂糖にくるんだのはありますか。」  
人は土産を買ふつもりであつた。旅

「はい、ございます。」

と答へたのは、桃色の手絡で、艶々しい圓鬘に結つた、綺麗な婦人であつた。背のすらりとしたのが、やゝ大柄に見えたのは、一とつは其の着つけの所爲であらう。上下大島の緋を着て居た。羽

織の紐を細くあはせたので、肉づきのいゝ胸も優しい。襟も清らかで、肌着の緋が幽に覗く、

ハツ口のきちんと正しく、内端に人形の衣裳に似て  
合つたのに、めりんすだと思ふ 眞新しさ  
うな友染も花やかだが、藤紫の襟が深い、肩のあたり  
の、何となく、さみしいとよりは陰気なのは、雪  
にうまれた女たちの例である。

「唯今。」

然う言つたのは、先客があつたからで。

年紀は二十で二ツ三つ越したらうか。まだ初々しい、嫁さんらしい其の女は、小さな折を上包みの紙につゝみかけて居た處であつた。

何か臺の上で、うしろ向きの羽織の肱の柔かく動くのか、緋の袖なぞへにほのめいた。あれが、縞だと、透通る。

向直つて、衣ずれの音をすつ／＼と、前褌が捌かれると、店の正面へ出て、少し斜かひになつて――其處に、髪かみの赤縮あかぢまれた丸顔まるがほの女中ぢよちゆうの立つたのを、親しみのある態度やうすで見ながら莞爾にっこりした。

「紅屋さんの女中さん、

あの

「へい。」

と、寒さうな聲を出す、兩の手首を筒袖へ引込めて、肩をすくめて居た。

「一寸、其處の砂糖の空箱の上に、先刻お客様にお貸し申したまゝで、小皿に糊の入つたのがあるんですよ。後生して、一寸取つて下さいましな。」

「へい。」

「おつかひ立て申して済みませんこと。」

お心安だてに ほゝゝゝゝ。」

と微笑む。ー 瓜核顔の鼻筋の通つた、目の

清しいのが 微笑むと、 白い齒

の、上の齒莖が漏れた。桃の熟した色がある。惜い、  
が、此が人間だ。然うでないと、品が好すぎて神々  
しからうと思つた。

「へい／＼。」

「ね、何うぞ。」

と一言ひかけて、在所を、目で知らせて、恚う氣  
組みに、袂の端を片手に取つた。

糊の皿は、ふと見ると、丁ど旅人の立つたうしろ

の荒<sup>あら</sup>けづりの箱<sup>はこ</sup>の端<sup>はし</sup>にある。成<sup>なる</sup>程<sup>ほど</sup>、明<sup>あき</sup>箱<sup>ばこ</sup>だ。折<sup>をり</sup>から時<sup>し</sup>雨<sup>ぐれ</sup>の晴<sup>はれ</sup>間<sup>ま</sup>だつたが、まだ霰<sup>しじく</sup>する番<sup>ばん</sup>傘<sup>がさ</sup>が一本<sup>いっほん</sup>立<sup>た</sup>掛<sup>か</sup>けてあつた。

旅<sup>たび</sup>人<sup>びと</sup>は借<sup>か</sup>りた傘<sup>からかさ</sup>を縦<sup>たて</sup>についで佇<sup>たぐず</sup>んだのであるが、店<sup>みせ</sup>はぐるりと高<sup>たか</sup>く取<sup>と</sup>つて、細<sup>ほそ</sup>い臺<sup>たい</sup>のやうに仕<sup>し</sup>切<sup>き</sup>つてある、土<sup>ど</sup>間<sup>ま</sup>に置<sup>お</sup>いた瀬<sup>せ</sup>戸<sup>と</sup>の火<sup>ひ</sup>鉢<sup>ばち</sup>も、傘<sup>からかさ</sup>の脊<sup>せ</sup>ほどに突<sup>つ</sup>立つ。いま其<sup>そ</sup>の氣<sup>き</sup>組<sup>ぐ</sup>んだなりで、ひよいと褻<sup>つま</sup>さきを、もろに上<sup>あ</sup>げて、のしかゝつて乗<sup>のり</sup>出<sup>だ</sup>して、腕<sup>うで</sup>をずつと伸<sup>の</sup>ばせば此<sup>こ</sup>のうつくしい嫁<sup>よめ</sup>さんの手<sup>て</sup>は皿<sup>さら</sup>に届<sup>と</sup>く。

女<sup>ぢよ</sup>中<sup>ちゆう</sup>を頼<sup>たの</sup>んだのは、旅<sup>たび</sup>人<sup>びと</sup>を憚<sup>はぶ</sup>か<sup>か</sup>つて控<sup>ひか</sup>へたのである。と氣<sup>き</sup>がついて、

「此<sup>これ</sup>ですか。」

「あれ、まあ、難<sup>ありがた</sup>有<sup>た</sup>う存<sup>ぞん</sup>じます。」

と不<sup>ふ</sup>意<sup>い</sup>に打<sup>う</sup>たれて口<sup>くち</sup>籠<sup>ごも</sup>つたのを、すぐ、しとやかに言<sup>い</sup>つた。が、やゝ急<sup>いそ</sup>ぐやうに、爪<sup>つま</sup>先<sup>さき</sup>を浮<sup>う</sup>かして疊<sup>たぐみ</sup>を切<sup>き</sup>つた。

上<sup>う</sup>包<sup>ほう</sup>みを糊<sup>のり</sup>で封<sup>ふう</sup>じて、其<sup>そ</sup>の紅<sup>べに</sup>さしを拭<sup>ふ</sup>布<sup>ふ</sup>で反<sup>そ</sup>して、清<sup>きよ</sup>めながら、またいまのやうに、袂<sup>たもと</sup>を袱<sup>ふく</sup>紗<sup>さ</sup>に折<sup>を</sup>つて、紅<sup>こう</sup>梅<sup>ばい</sup>色<sup>いろ</sup>の裏<sup>うら</sup>灰<sup>はい</sup>に、しとやかに八<sup>や</sup>口<sup>くち</sup>へ挟<sup>はさ</sup>んで、白<sup>しろ</sup>やかな手<sup>て</sup>を宙<sup>ちゆう</sup>に伸<sup>の</sup>した。天<sup>てん</sup>井<sup>じやう</sup>に棹<sup>わく</sup>の車<sup>くるま</sup>で、淺<sup>あ</sup>葱<sup>さき</sup>のテツプ

が巻いてある。

肩も腰も大島もやゝ伸びたが、もう些とで指のさ  
きが届かない。――前に、短く戻し過したか  
らである。

「よ

と小さく言つた。

頭もともに鬢が揺れて、うしろ状に背を反す。其  
の高く縫らうとする指さきは、天井の雲の青空に、  
紅い千代紙の袖口から、眞白な折鶴の舞ふ風情であ  
る。

旅人が恍惚する時、あさぎの紐は折鶴を巻いてす  
らりと下つた。

此の舉動に、ずるりと落ちた、袂を、口に銜へな  
がら軽い吐息をして結んだ。

「お待遠さま

「女中の、折と傘を引抱へて、前屈みに成つて、  
紺革袋で歸つたあとで言つた。

「折を一つ見せて下さい。」

「はい。」

二つ並べて、小さな方を此方へ寄せる

賣る人が内端なため、旅人はその大い方を誂へた。

店の正面の硝子戸棚の、上の段に、カステラと、西洋菓子の花のやうなのが並んで、胡桃は下の長箱に入つて居た。嫁さんは横顔で、伏目に膝をついたが、襟の色も紫に映つて、温室の戸を開けたやうで、旅人の手さきを翳した火鉢の灰も、此の時は温い。

はら／＼と、静な音を立て、白い胡桃は、撓ふ指とゝもに、折に並ぶ、と、見るうちに、一顆笑つたやうに、いや拗ねたやうに、あらず、からかつたやうに、ひよいと手を這つて、ころんと疊に轉がつた。

此が、奇怪な、世の中の寶であつた。

頤で斜に視つゝ、撮んで拾つて、しづかに折に入れようとするのを視た。

「あゝ。」

旅人は聲を掛けた。

「不可い

東京へ歸つて、遣ひものにす

るんですから。」

嫁御寮はハツと色を染めた。恥ぢて、ハタとついた膝で、且はずむやうに衝と立つて、素直に店から戸外へ投げようとした。

また袖口に、天女の弄ぶ、白い筑根のやうなニが見えた時である。

「勿體ないー 勿體ないぞー」

中仕切の、もの蔭から、人とも獣ともつかず、たとへば九官鳥の呟くが如き聲を發した。

がらり／＼がらり、ざら／＼、その蔭に、金平糖を搔くらしい音がする。

あはれ、御寮は、胸を打たれたが、あわたゞしげに、もとの箱へ戻さうとしつゝ、また旅人を見て猶豫つた。

袂に入れようとしてたゆたつた。

時に、兩手を、雙の掌を、拝むやうに合せて、薄手なその甲に、圓鬚の傾くばかり、頬を押あてながら、立つて旅人を視て言った。

「何うしませう、私、何うしたら可いでせう。」

「半分づゝ食べませう。あなたと  
旅人は決然として言つた。」

「手で破つては不可ません。」

私は此の國のものです。胡桃を知つて居ます――  
破ると碎けて了ひます。あなたの口で

あとを半分。」

「えゝ。」

「いた瞳に、うまれて以來の、あらゆる影、過世  
の幻、未來の地獄さへ宿しつゝ、口の藪が爽に開い  
た。あゝ、その齒莖もきれいだ。且つ血が上つて、  
たゞれたかと思つる中に旅人はおのが舌の先が、白い  
魂になつて轉ぶよ、と其の胡桃を視た。」

大な猿の山猿は、雪を溢れた實のやうに、半分嫁  
さんの掌から頬張つて、さつとかゝる片時雨の暗い  
軒を、傘もさゝず逃出した。」

町に久しい金看板の老師の薬店の、金雲圓の門探  
き中庭に、千とせ年経る老松の、道をさしのぞいた  
梢に、八々と目を打たれて、突當るやうに思つて振

返ると、振上げ振廻す金平糖の掛鏝が火のやうに見えた。  
片腕で掴み伏せた夫の下に、褌を染葉に、手を散して、肌を亂して、鬚を水々と倒れて居た。

旅人は、瞬間、お伽話の魔神の犠牲の姫君を思つた。

が、あの肉體、手足は半分に裂く事は出来まい。

胡桃でないなら。

それにしても、甘い肝のやうに、いま咽喉を通つた胡桃の、此の一顆は、山探くあつた時、山の神様が不思議なお禁厭をして置きなすつたのであらう。

松の梢にその山の影がさす。――

旅人は 然う思つた。 なほ、

いつさんに逃げながら。

と旅人が言つた。

【完】